

金融市場動向

— 平成7年7月 —

(平成7年8月14日)

1. 短期金融市場

7月中の無担コール・オーバーナイト物レートは、上旬に日本銀行の市場金利引き下げ措置を受けて大幅に低下し、その後は弱含みに推移した。CD（譲渡性預金）3か月物レートは、上旬に大幅低下した後、弱含みに推移した。一方、ユーロ円金利先物（3か月物、金利ベース）は、上旬に低下した後、月央にやや強含んだが、月末にかけて再び低下した。

コール・プロパー手形市場資金平均残高（全国）は、44兆6,046億円と前月（43兆3,711億円）に比べ増加した。

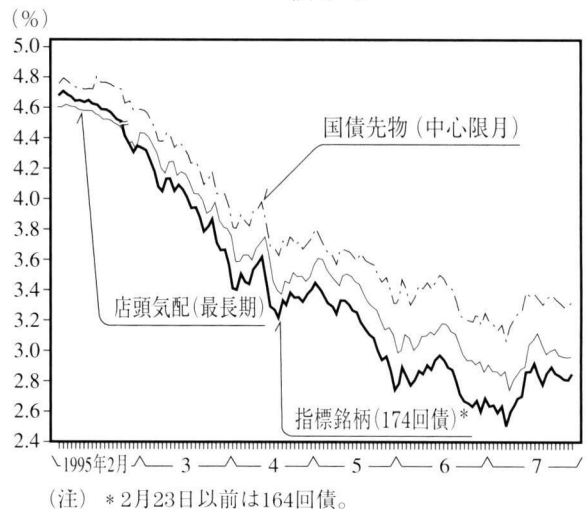


2. 資本市場

7月の長期国債利回り（174回債）は、上旬

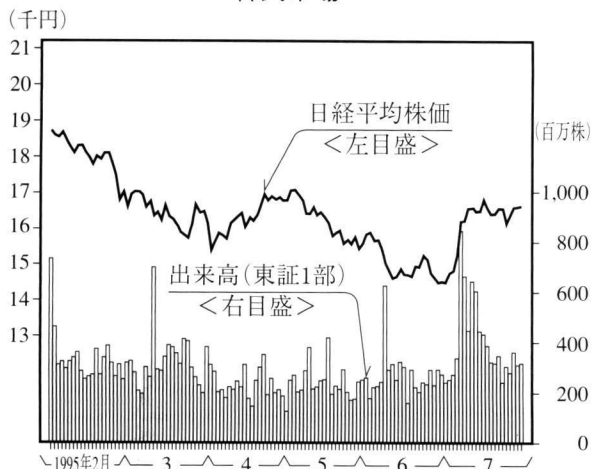
に日本銀行の市場金利引き下げ措置による短期金利の低下を受け、史上最低値（7日2.505%）を記録したが、その後は株価上昇や円高の修正等を背景に上昇し、結局2.850%で越月した（前月末2.690%、国債先物中心限月利回りは3.333%＜前月末3.247%＞で越月）。国債の出来高は、現物（店頭取引）、先物ともに前月を下回った。

既発債市場利回り
— 国債市場 —

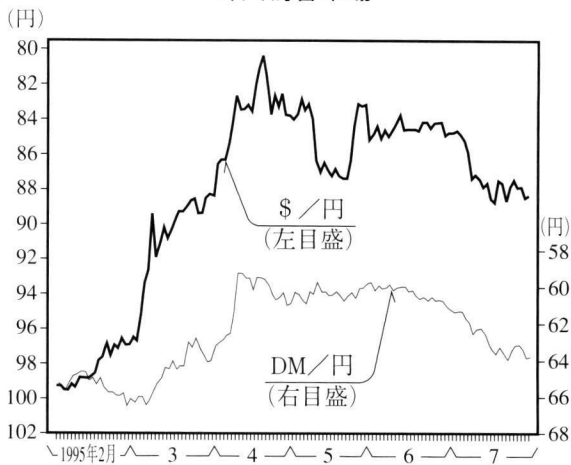


株式市況（日経平均株価）は、上旬に短期金利の低下を受けて急騰し、その後は円高の修正等から堅調に推移、結局16,677円と前月末（14,517円）を大きく上回って越月した。株式出来高（東証1部、月中1営業日平均）は、4.01億株（速報）と前月（2.73億株）を上回った。

株式市場



外国為替市場



7月の国内公募普通社債は、長期金利に対する底値感の拡がり等から前倒し起債が継続し、月中4,040億円（6月4,450億円）と引き続き高水準の発行となった。一方、国内エクイティ市場での発行（7月払い込み分、増資を除く）は、発行体の業績回復見通し難等から低水準の発行となった（6月起債ゼロ→7月145億円）。

3. 外国為替市場

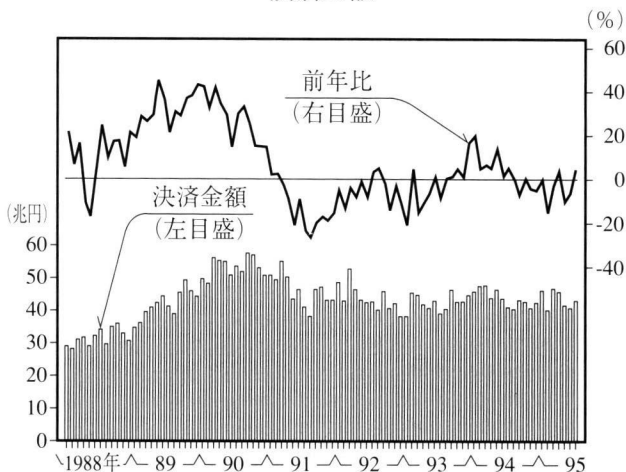
7月の円の対米ドル直物相場（東京市場）は、上旬の日米両国の市場金利引き下げ措置やその後の協調介入を受けて、月初の84円台から中旬には一時89円台まで下落した。その後はやや値を戻し87円台に上昇する場面もみられたが、結局88.17円（17時時点）で越月した（前月末84.77円）。円の対独マルク直物相場（東京市場）は、月中を通じて下落基調を辿り、結局63.82円（17時時点）で越月した（前月末61.22円）。

この間、東京外国為替市場の出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均）は222.2億ドルと、前月（200.2億ドル）を上回った。

4. 決済

7月の資金決済の金額（1営業日平均）をみると、手形交換高（東京）は前年同月を大幅に下回った（前年比△37.5%）が、全銀システム取扱高は前年同月を上回った（同+18.0%）。この間、外為円決済交換高は前年同月を上回った（前年比+15.3%）。また、国債の決済金額（1営業日平均）については、移転登録、振込口座振替ともに前年同月を上回った（移転登録：前年比+46.9%、振込口座振替：同+8.0%）。

決済金額



(注) 1. 1営業日平均。
2. 手形交換高(東京)、全銀システム取扱高、外為円決済交換高の合計額。

5. 資金需給、金融調節

7月の資金需給をみると、銀行券要因は6,143億円の余剰(前年同月4,552億円の余剰)となった一方、財政等要因が4兆4,972億円の不足(同9,425億円の不足)となったことから、全体では3兆8,829億円の不足(同4,873億円の不足)となった。

こうした状況下、日本銀行はF B買戻し等により資金を供給した。

8月の資金需給(国債発行織り込み前)を窺うと、銀行券要因は、1兆1,000億円程度の余剰(前年同月7,393億円の余剰)となる見通しであり、財政等要因も、夏季ボーナス等に係る源泉所得税を中心とする税揚げ等が見込まれるものの、国債償還や国民・厚生年金の定時払い等が嵩むこと^{かさ}から、2兆6,400億円程度の余剰(同2兆7,273億円の余剰)となる見通しであることから、全体では3兆7,400億円程度の資金余剰(同3兆4,666億円の余剰)となるものと予想される。

6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

6月のM₂+C D平残前年比伸び率は+3.2%(速報)と前月に比べ0.1%ポイント低下した。また、広義流動性の平残前年比伸び率は+3.9%(速報)と前月に比べ0.1%ポイント低下した。

7月の銀行券平残前年比は+4.3%と前月(+5.1%)に比べ低下した。

7月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残(実質預金+C D、都銀、地銀、地銀Ⅱ)の前年比は+2.6%と前月比伸び率が上昇した。一方、総貸出平残(都銀、長信、信託、地銀、地銀Ⅱ)の前年比は+0.8%と、前月に比べ0.3%ポイント上昇した(3か月連続の前年比プラス)。

7. 貸出・預金金利

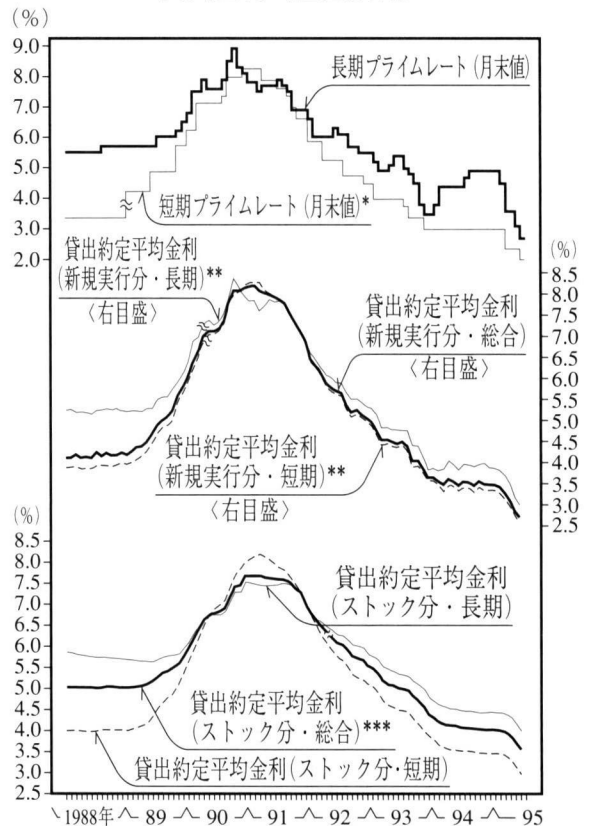
6月中の貸出約定平均金利(全国銀行)をみ

ると、新規実行分については、短期が5か月連続、長期が7か月連続で低下した(短期:前月比△0.158%、長期:同△0.174%)ため、総合でも8か月連続で低下し(同△0.158%、5月2.859%→6月2.701%)、既往ボトムを更新した。

また、ストック分についても、短期、長期、当座貸越ともに低下し(短期:前月比△0.180%、長期:同△0.145%、当座貸越:同△0.205%)、総合では24か月連続で既往ボトムを更新した(総合:5月3.740%→6月3.575%)。

この間、6月の定期預金金利(1千万円以上、3か月以上6か月未満の全銀受入金利平均)は、前月に比べ低下した(5月1.244%→6月1.136%)。

貸出金利(全国銀行)



(注) * 1989年1月以降は都市銀行の中で最も多くの銀行が採用した金利。

** 1990年4月以降は地方銀行Ⅱを含む。

*** 1992年4月以降は当座貸越を含む。

(調査統計局)